

日本に残留し定住したある中国人

～在日華僑・韓慶愈が生きた「もう一つの昭和史」～ 第6回

大類 善啓

《前回までの粗筋》 新中国の誕生は、華僑たちの帰国熱を促し、韓も1953年第1回の帰国船に学生代表として中国に行き、天津で廖承志に面会した。その時廖は、韓に中国に帰国せず「日本に残り、華僑向けの新聞を出せ」と指示。日本に戻った韓は、『大地報』という新聞を創刊した。日中関係は徐々に発展、韓は通訳などでも大活躍。1970年には訪中し、新しい中国を見る。文化大革命の時期は、日本にいる華僑とはいえ様々な問題にぶつかった。その混乱のなか、中国にとって必要なのは日本の先進的な科学技術や工業技術ではないかと思い、『日本工業技術』という雑誌の刊行を思いつく。横やりも入ったがなんとか発行にこぎつけた。イデオロギーや思想ではなく、現実を見ていこうという動きがやっと芽生えてきた。

4.2 日本の左翼とは一線を画す

今回は少しばかり時間を戻し、日本の戦後状況を韓慶愈がどう思い、どのように関わってきたのか、今までやや書ききれていなかった部分を補っていきたい。

1949年、新中国が激しい国共内戦を経て成立した。中国共産党の勝利という現実、日本にも少なからず大きな影響を与えた。とりわけ左翼運動に対する影響は大きかった。しかし、世界の共産主義運動の中心はまだ、ソ連が主導的な役割を果たしていた。そのソ連の絶対的な指導者だったスターリンが1953年に死亡した。留日（在日）中国学生会の主席をしていた韓は、東京港区の狸穴にあったソ連代表部に弔問に出かけた。左翼の中では、スターリンがまだ神様のように思われていた時代である。韓にも、スターリンはやはり、絶対的な存在に映っていた。

日本共産党は、新中国の影響もあったのか、激しい戦術を展開していた。その一つが山村工作隊だ。毛沢東の中国共産党が農村を拠点としているのに倣い、武装闘争を志向したのだ。韓が在籍した東京工業大学の同級生の中にも、大学を中退して山村工作隊に入った人もいた。知り合いではない。韓はとりたてて共鳴するわけでもなく、「中退などしなくて卒業してからでも間に合うのに。惜しいことをしたな」と思った程度だった。

1954年10月、李徳全を団長とする初の訪日代表団「中国紅十字会代表団」の副団長として来日した廖承志は、華僑たち600名ほどが集まった東京での歓迎会の席上、「留日華僑の基本的態度」という挨拶を行った。その中で、華僑の基本的態度は、①外国の政治問題には絶対関らないこと。②お互いに団結して助け合うこと。③外国の風俗、習慣になじみ、その国の法律をよく守ること。④外国の長所をよく学び知識を豊富にすること、と語った。この時の挨拶は、出席した華僑たちに深い感銘を与え、多くの教訓を残した。

また神戸の歓迎僑民大会でも「華僑は現地の政治問題に介入しないことが大切です。このことに違った意見をもつ人があるかもしれませんが、こういう態度でやってはじめて、現地の住民と友好的にやっていけるのではないのでしょうか」と語っている。

こういう考えは、韓の頭にも十分入っていたから、日本の左翼運動に対しても、とりわけ深入りすることはなかった。廖承志が来日する1年前にも、内々に党（日本共産党）から離れるように言われていた。

1955年、日本共産党は党大会で、山村工作隊などの過激な戦術を取った路線を、極左冒険主義として総括し、より大衆に密着するように路線を転換した。

こういった日本共産党の動きには、無関心といってもいいほど問題意識もなく、韓に言わせればそれは、「雲の上の話」だった。

しかし、山村工作隊の活動と称して、5、6人のグループで、米軍の立川基地周辺や砂川地域を勉強の為に歩いた。基地周辺の朝鮮人の家に行くと、犬の肉をご馳走になり歓待されたこともあったという。当時の日本共産党中央は、在日朝鮮人や在日華僑を日本での「少数民族」として位置づけていたので、同じ「少数民族」である朝鮮人とも一緒に活動した。華僑と朝鮮人とは、お互いに教えたり教えられたりする関係だったのだ。

4.3 徐々に大陸派と台湾派に分かれた華僑たち

1949年の新中国成立前後は、読書会と称して同志たちが集まり、華僑の団結と組織を強化するような活動をした。読書会という名前をつけたが、改めてテキストを決めて勉強するわけではない。10人ほどの仲間が集まり、華僑の愛国団結の強化や国民党に対する戦い、台湾の解放を目指すような勉強会である。

華僑総会の理事選挙では、国民党に近い人、いわゆる台湾派ではなく、中国共産党に近い仲間を理事に出すように運動をした。現在は、中国大陆を支持する華僑と台湾を支持する華僑たちはそれぞれ別々に華僑総会を作っているが、当時はまだ華僑総会も二つに分かれてはいなかった。

商売人が多かった華僑は、理事の選挙といっても問題意識は希薄だ。何のための選挙なのか、その意味をつかめていなかった。そういう点では、「日本人よりは遅れていた」と韓は認識していた。選挙とは何なのか、そんな問題意識を植え付ける。組織意識も弱かった。そこで、まず組織意識をもってもらい、進歩的な人に理事になってもらうように活動をするのだ。

また、気心が通じている人に理事になってもらうべく、その人にみんなの前で演説をやらせたり、票を集めたりして工作する。今度の理事選挙は大事だからあの人を選ぼう。あの方は、みんなのことを考えているからといって選挙活動をするのだ。

台湾省や、東北などの北省とか、各省でまとめて候補者を出すようにもしていった。徐々に智慧がついてきて、選挙の前には、北省なら北省で適当な人数に絞り込んで送り込むというふうにしていった。当然、各省から理事が推薦されて選ばれていく。それ以外は、一般の会員から理事を選んでいく。大会には会員が1,000人、多い時は1,500人も集まってくる。そのために豊島公会堂や共立講堂、あるいは読売ホールや文京公会堂などを借りて大会を開催し、50人から60人ほどの理事を選挙するのだ。

4 4 歌と踊りで結束

華僑といっても、日本社会でどっぷりと生活していると中国人意識も希薄になり、日本に没入してしまう。そのため韓たちは、勉強会を通して、中国人として自覚や意識をもたせようとした。

当時はまだ訪中する人がとても珍しかった時代である。そんな時代に訪中した日本人を呼んで講演会を開催し話を聞く。新しい中国の変容ぶりを直に見た人から話を聞くのは、大きな収穫だった。

ともすれば日本語で会話するばかりで、中国語も忘れがちな華僑たちである。二世の華僑などは、はなから中国語も話せない。そういう中で、「国語（中国語）を学ぼう」と仲間呼びかける。こういう活動をする場合、民族意識をもつ手本として朝鮮青年同盟があった。朝鮮大学校を訪ねては、実際に民族教育をどのように行っているかを視察に行ったこともある。

横浜の華僑学校にも行き、中国の民族教育を実際に見て、民族意識をもつにはどうすればいいかを仲間と検討した。そうして生まれたのが、中国の歌を広める音楽活動だった。中国の歌を翻訳し中国語の歌を唄ったりした。「草原情歌」の日本語訳もそんな中から生まれた。ガリ版刷りで歌集を6集まで作った。最初は、中国人だけでやっていたが、後になって日本人で歌の好きな人が集まってきた。

華僑総会とか学生会の会議室に20近い人が集まり、「東京—北京」などの歌を唄う。中央合唱団ともつながりが出来て、団員が後楽寮に教えに来るようになった。指揮者も出てくるようになった。勇ましい歌あり、叙情の歌がありと多彩だった。中国の歌が好きな日本の若者も一緒に合唱をするようになり、それが「中国音楽研究会」に発展した。

文化大革命の時代は、「北京の金の山」「大海に行くには舵手に頼る」「東方紅」「労働者には力あり」「団結は力なり」「東の空は明るい」など、毛沢東を讃える歌などを集まって唄うのだ。

中国の踊りを習うことも、長く続いた一つだ。洗濯の踊りや秧歌（ヤングウと発音する）という歌で踊るのだ。秧歌とは、農民の田植えの歌である。韓に言わせると、日本の盆踊りみたいなものだという。たまたま手元にあった学研の新版「漢字源」を開いて、<秧>を引けば、ちゃんと出ていたのには驚いた。もと中国農村の田植え歌とあり、その後<今では歌と踊りで構成された、フォークダンスのような民族芸術となった>と説明されている。

抗日戦争や国民党との解放戦争の時は、いたるところで踊られたという。<秧>には、採り入れや苗を植え付けるという意味がある。解放軍が村に入ると、秧歌で歓迎され迎えられるのだ。というのも、解放軍の主体が農民だったということである。韓は、「今でも踊れる」というので見せてもらったが、いたって簡単な踊りだ。農村で苗を植え、刈り取りをする格好を踊りにしたものだ。「田舎の踊りだよ」と韓はいう。それでも華僑たちの集まりを早稲田大学の大隈講堂でやり、日本で初めて披露したそうである。1951年のことだ。「私が振付けたんだが、歴史的なものだと思う」と、やや得意そうにいうのだった。

この単純な踊りも、解放前と後ではリズムが違うらしい。解放前と違って、解放後はみ

んな喜んで自然発生的に踊り出すという。新中国では、秧歌隊として文化工作隊の一つとして、赤や青の派手な帯を締めて踊り歌い、各機関が国慶節などに街で練り歩くのだ。とりわけ秧歌は、旧正月に必ず踊るらしい。北京などの都市でも、秧歌で解放軍を迎えたという。農民が主体である解放軍を歓迎するには大変良かったようだ。

45 映画「白毛女」に感動

踊りも南の方へ行くと茶摘みの踊りがある。韓はそんな踊りも、華僑の青年たちに教えた。若かったこともあるだろう。みんなから「韓さん、踊ってよ」といわれると、見様見まねでやり華僑青年が踊る。そんな日が続いた。社交ダンスも盛んだった。華僑青年が住む後楽寮には、毎週土曜日にアコーディオンを引く楽団が来てダンスパーティだ。

当時はテレビもなく、みんな娯楽に餓えている。ダンスパーティがあると聞きつけて、近所から娘さんや勤め人が来る。パーティは常時、4、50人が集まった。多い時はもっと増える。当時のお金で70円とか100円の会費だ。そんなパーティが縁で、留学生で日本人と結ばれた者もいた。

大学でも社交ダンスが流行っていた。当時は、ちゃんと踊れる人がパーティになるとやって来て、ダンスを教えてくれるのだ。トロットとかタンゴとかワルツとかを踊る。今と違って韓も若い。「体も軽かったから、大いにダンスを楽しんだ」。そんな時代だ。

秧歌、茶摘み踊り、洗濯踊り、チベットの女性だけがやる踊りなどを、映像を見せて踊る。歌舞団が踊ったのを見て、真似て国慶節の記念集会でのアトラクションなどで披露するのだ。合唱や華僑青年の踊りなどで、1時間から1時間半の時間がもてるぐらいのレパートリーができるほどだった。そういう活動を通して華僑の青年活動を広げていったのだ。

映画の鑑賞会も盛んにやった。映画を見ながらナレーターもやった。当時見た映画で今でも記憶に残っているのが、「ぶどうの実る頃」や「淮河の水利工事」「白毛女」などである。16ミリの映写機をかついで、中国から寄贈されたこれらの映画を仙台や神戸に出かけて上映したこともある。映画を見せながらナレーションを入れてやるのだ。青年会から活動費をもらったり、カンパしてもらったりして、お声がかかれば日中友好協会の集会をはじめ、どこへでも行くのだ。

新中国の情報が乏しい時代である。「白毛女」を見て、「感動しました」と握手を求めてきた日本人もいた。

46 変化する「中国人意識」

これらの新しい中国映画を見て、中国の新しさを実感するのだった。映画を観て韓は、「それまでの中国の人間と人間関係の有り様が違う」と思ったというが、具体的にそれはどういうことを意味するのだろうか。その点を詳しく聞いた。

韓は、留学生として日本にやって来た。

「旧満洲国時代の僕らは、＜中国人としての意識＞で何かやるということにはできないわけです。日本人の言いなりにならざるを得ない。戦争が終わるまではそうだった。日本の政府は、日本のために働くような人材にさせるために留学生として連れて来て教育した。日本政府は、我々を一応大事にしてくれる。しかし本意は違う。将来は日本のために働く青年幹部という方針ですよ。

戦争中、日本の若い人たちは兵隊になることが目標だという人が多かった。もっと具体的にいえば、海軍兵学校に行くとか陸軍士官学校を受けるとかが、中学生のみんなの望みだった。そんな日本人に自分も影響を受けるわけだ。しかし、<俺は日本人ではない、中国人だ。中国を良くするためには、中国の兵隊にならないのはいかな>と思うわけです。愛国的な風潮に煽られて、兵隊になる方法はないのかと思ったりするんだ。<日本人が自分の国を愛して、戦争にはせ参じる>のと同じような意識で自分たちも、<兵隊になって国を建て直すんだ>という気持ちになる。それは、日本の侵略者を中国から追い出すという考えですよ。言ってみればそれは、屈折しながらも日本で教育された影響だと思う、と韓は言う。

そうして、中国人としてどうしたらいいかを考える。時にはこんな考えが浮かんだりするのだ。「重慶へ行けるかな」。「重慶は抗戦の地でしょう。当時は延安の共産党なんて、頭にはなかったよ」

「共産党は怖い」というイメージを、韓は根強く持っていた。旧満洲での日本の宣伝の影響である。「赤い熊」という漫画を描いて、これが共産主義だ、これは怖いぞという宣伝だ。まだ中学にも行かない韓は、狼とか赤い熊が口を開けて、いかにも自分を呑み込むような漫画である。日本の関東軍はこうやって共産党の恐怖心を煽っていたのだ。

47 呉学文との出会い

後年、呉学文という存在を知る。日本の陸軍士官学校を卒業したエリート中のエリートだった呉学文は、卒業後帰国し満洲国軍に編入され、少尉に任官される。軍務に服するがそのまま満洲国軍に留まることを善しとせず、敢えて危険な道を選んで、抗日の闘いに邁進している国民党に行った。しかし徐々に国民党の限界に気づき、共産党に移ったのだった。

戦後もだいぶ経ってから、韓は呉学文の手記を読んだ。

「彼は日本軍の軍服を着て、北京からとぼとぼ歩いて河南省まで行き、日本の影響区域を潜り抜けて、国民党の陣地にたどり着くんですよ。彼の文章を読んで感動したね。<自分の考えで自分の国を良くしよう>という意識が湧いてくる。留学生だった当時、呉学文の行動を知っていたら、全く同感しただろうね」

呉学文は、李徳全を団長とする最初の中国訪日団に随員としてやって来た。2回目の貿易代表団の記者グループにも入っていた。訪日団の通訳をやっていた韓は呉学文と親しくなり、今でも先輩として交流をする仲である。

「日本の中学校で、中国から留学生たちが寄り集まった時、いやあ我々も中国人として戦争で日本軍と戦うということができればな、と思った。日本で教育を受ければ受けるほど、自分の祖国はどうだろうか考える。日本の侵略を受けていると思うと、一人の中国人としてどういうふうに愛国の行動を取るか。一つは呉学文さんのような考え方に到着するでしょうね。もう少し先進的というか左翼にいけば、<延安>ということになるでしょう。延安に惹かれていく。孫平化がそうでしょ。呉学文は国民党に行き、その後<共産党でなきゃいけない>となったわけです。ぼくが当時もうすこし大人で、それだけの行動力があつたなら、たぶん重慶の方だったろう。共産党は日本の宣伝の影響で怖かったもの」と語る韓だった。

48 作られた「共産党は怖い」というイメージ

その「怖い」というイメージも、解放戦争で予想もしなかった共産党が徐々に国民党に勝ってきたことと、さまざまな情報を得て旧い共産党観が崩れていき、共産党も怖くないと思うようになってきた。

その上、戦後は中国の共産党から留学生への救援金が送られてきた。韓は、これには驚いた。香港ドルや英国のポンドで送られてきたという。

日本軍が中国から略奪した繊維類が新潟にあるとわかり、学生会のトップとして、国民党の代表団に押しかけて要求したこともあった。生活がやっていけない終戦直後は、日本の外務省から留学生は月500円をもらったりしたこともあった。

以前書いたように日本の敗戦前は、韓は満洲国の大使館から奨学金をもらっていたので問題はなかったが、日本が負けてからは困った。1946年（昭和21年）の春ごろ、新円の切り替えが始まった。100円しか切り替えられないのだ。

正統政府である国民党に生活改善を要求したが、いい結果を得られなかった。しかし中国共産党は、貧しい留学生に学費を援助しようと中国から同学会に事実、お金を送ってきたのだ。

1952年頃、各自月6千円もらったという。韓たちは、それぞれの学生の家に行き、本当に困っているかどうかを調査した。時代は朝鮮戦争中である。中国は「国」として今のようにお金があったわけではない。そんな状況下でも貧しい留学生に新中国は、学費を援助した。多くの中国人学生たちは新中国に惹かれていった。

1953年、韓が学生代表として帰国者たちを率いて送るために一時帰国した時、このことを中国側に報告した。「自慢じゃないけど、留学生の所に足で歩いて行き、彼らの実情を見て、学生たちに金を渡してきたのだ」と堂々と報告した。こういう運動をして、大陸出身者や台湾出身者に関らず、何万ドルかの金を貧しい留学生の奨学金として渡してきたのだ。韓は、翻訳や通訳などのアルバイトがあったので貰わずにきた。

49 寛大な解放軍精神

1953年は、日赤などの協力で中国から日本人の引揚げ業務が再開された年だった。中国共産党に「洗脳された人々」として、一部は公安に警戒された。そんな中国帰りの日本人と韓たちは、盛んに交流した。しかし、中国から帰国した人々は、韓から見ると中国のいいことばかり言う人たちが多かったように思えた。それが、「蚊もいない蠅もいない清潔な中国」という言葉だ。中国にいろいろ恩恵を受けていたから、今にして思えば、そうそう悪いことを言えない状況かとも思った。しかしその時は本当に素晴らしい国になったのだと思った。華僑の帰国運動が更に高まった。

撫順収容所に収容されていた戦犯たちも起訴免除され、釈放され帰国してきた。中国共産党の実に寛大な処置の結果である。国民党は800万という兵隊がいたが、結果的に200万足らずの兵隊しかいなかった共産党に敗北した。中国共産党が勝利したそのキーポイントが、この寛大な精神だった。

国民党の兵隊が逃亡し、共産党に投降する。その時も共産党は、殺さずに寛大な処置をする。解放軍に参加しない兵士には、旅費を与えて自分の故郷に帰すのだ。相手を殺さずに帰す。このような共産党の寛大な政策を、戦犯にも応用したのだった。

まず罪業を自白させ、罪意識を悔い改めて帰す。最終的には、将軍も兵卒も中国の寛大な政策に感動し、帰国後日中友好運動に参加していったのだ。

「満洲国」の皇帝も殺されることなく、許されて一市民として生活するようにはできた。中国の歴史を見ればわかるが、倒された王朝は、皇帝の一族郎党、九親等まで殺されるのが通例である。このような寛大な精神をもつ共産党を見て、続々と国民党の偉い軍人までが共産党の方にきた。

韓は、このような今までの中国の歴史にない、国民党から毛沢東、周恩来率いる中国共産党へ入ってきた人たちを「大地報」でよく載せた。集団で共産党へ移ってきた人もいた。蒋介石の直々の親衛隊も共産党にきて勝利に繋がったのだ。

50 中国帰りの日本人たちとの出会い

中国共産党を信じると同じように、韓は日本共産党を信じていた。1958年、当時の全学連の指導者たちが、日本共産党と決別し、新たな前衛党にすべく共産主義者同盟（ブンド）を結成したが、韓はその事実を知らなかった。前述のように「関心はなかった」のだ

しかし、大地報という華僑向け新聞の責任者として、1958年の中国の「大躍進」の報道には全力を尽くした。

新華社やアジア通信、中国から中国語で流れてくる中央放送局のラジオ放送、香港の大公報、文匯報などがニュースソースだった。中国新聞社の香港支社から配信されてくる記録を優秀な女性が拾い、また同じ中国新聞社のラジオ放送から流れるニュース「記録新聞をより早く聞くために、性能のいいアンテナを張った。

訪中した日本人からも、いろんな報告会で新しい中国事情を聞く。そこではしばしば、古い中国との比較で現在の中国が語られるのが通例だった。韓は、古い中国と比較すれば進歩は著しいが、日本と比較してどうなのか。過去の歴史から見れば素晴らしいけど世界的なレベルから見なければいけないのに、と思ったりした。

「大躍進」の報道に接すると、素晴らしいと思いつつ、「15年経てばイギリスを追い越す」という言説には疑問に思った。そんなに簡単じゃないと思いつつも、そういうスローガンが出てくると、「すごいな」と思う一面もある。鉄の製造の精錬運動には、これからの中国の意識を変えていくんだなと思っていた。しかし、現実には2、3年後に失敗したことが判明した。

その結果、毛沢東は劉少奇に国家主席を譲った。危機感をもった毛は、劉少奇を打倒しようと行動を起こす。文化大革命が始まる契機になるのだった。

1960年の安保闘争の時、韓はどうだっただろう。

反安保闘争は、直接的には日本の問題だ。内政干渉はしないという方針である。しかし、アイゼンハワー大統領が訪日する際、「台湾へ行く」という情報が入った。台湾ということになると、華僑たちにとっては中国の問題である。直ちに、「アイゼンハワーの台湾行き反対」というスローガンを掲げて、何百人かを動員して、「アイクの台湾訪問反対」というプラカードを持ち、老華僑は旗をもってアメリカ大使館までデモ行進をした。そんな老華僑を撮った韓の写真が、華僑の写真コンクールで賞を取ったこともあった。(次号続く)